

## 【学会レビュー】

## The International Yeats Society and the Yeats Society of Japan Joint Symposium in Kyoto 2018 / the 54th Annual Conference of the Yeats Society of Japan

(2018 国際イエイツ協会・日本イエイツ協会合同共催大会 / 第 54 回日本イエイツ協会年次大会)  
会場：京都大学 百周年時計台記念館 参加者数：200 名

日程：2018 年 12 月 15 日（土），16 日（日）

海老澤 邦江\*

2018 年度日本イエイツ協会年次大会は、国際イエイツ協会との共催となった。この大会は、W.B. イェイツ生誕 150 周年を記念し、2016 年に第 1 回国際イエイツ協会大会がダブリンで開催された際、国際イエイツ協会からの要請に応える形で、京都で開催することが決定されていた。そのきっかけとなったものが、本大会でも上演された狂言『猫と月』のアイランド公演であった。佐野哲郎氏（京都大名誉教授）が翻訳した、イエイツの戯曲『猫と月』を狂言として、十四世茂山千五郎氏をシテに狂言大蔵流茂山家が演じた。このアイランド公演には、日本イエイツ協会・日本アイランド協会等の国内の主なアイランド研究の学会も後援し、国際交流基金・大阪万博基金・放送文化基金の公的的外部資金から多大な援助を獲得し実現したものである。

まず、第 1 日目には、佐藤容子氏（東京農工大学の司会で、ショーン・ゴードン（バルセロナ大学）、キム・ヤムミン（韓国・東國大学）の各氏が、統一テーマ「イエイツと笑い」と題し、世界文学としての評価、これまで論じられることがなかった、イエイツ作品に表れるユーモア・ウィット、隠されたアイロニーについての基調講演を

行った。日本イエイツ協会員を始め、アイランド・イギリス・フランス・ギリシア・スペイン・ノルウェー・ポーランド・アメリカ合衆国・韓国・インド等からの研究者の口頭発表が 2 日間を通じて 21 本あった。初日は、およそ 10 本の口頭発表後に短時間ではあったが、国際色豊かなレセプションで意見交換が活発に行われた。その後、能楽堂嘉祥園に場所を移し、観世流能楽師井上裕久氏がユーモアたっぷりに、能舞台や能・狂言の基礎知識、日本の古典芸能に関するレクチャーを行った。そして茂山千五郎家による狂言『猫と月』の上演。あらためて世界文学としてのイエイツの作品を鑑賞・検討する貴重な機会となった。

翌 2 日目午前には、狂言『猫と月』の公演を受け、真鍋晶子氏（滋賀大学）を中心としてマーガレット・ハーバー氏（リムリック大学・前国際イエイツ協会会長）、アレクサンドラ・ポーレイン氏（パリ・ソルボンヌ大学・現国際イエイツ協会会長）によるシンポジウム。午後には、さらに 10 数本の口頭発表が続き、終幕にもかかわらず、熱心な質疑応答や意見が交わされた。本大会の締めとなる、高名な日本庭園を臨む高瀬川二条苑での大会正餐においても、活発な意見交換が行われる。大会の成功を祝うとともに、別れを惜しみながらも、今後の研究の進展と両協会の交流の継続を参加者全員が願ってお開きとなった。

2019 年 1 月 16 日受付

\* 江戸川大学 情報文化学科教授 英米・英語圏文学、文化比較

2日間を通じ、海外からの参加者が非常に多く、あらためて世界文学の視点から、現代の批評眼に十分耐えうるイエイツ作品の普遍性を確信する学会となった。ただ1点、残念に思うことは、発表者が多かったので、有意義な発表をすべて聞けなかったことだ。しかし、時間上の問題なので致し方ない。また、文学的アプローチの違い、並びに時間的制約の問題からであろう、テキスト・リーディングが犠牲にならざるを得なかった。とは言

え、日本文化とヨーロッパ文学との接点を、21世紀のグローバル社会で実現・再考できたのは、今後の研究活動の発展に資するところが大きかった。また、こうした研究活動が、知的・人的交流を促し、グローバル社会の課題解決のヒントを与えてくれる機会ともなった。日本文化に初めて触れる海外からの研究者にとっては、京都の土地柄は新鮮な驚きとなったろう。